

応答責任としての対話——ガダマーとデリダ

白鳥まや

1. ガダマーとデリダのAuseinandersetzung^{や り と り}

ハンス＝ゲオルク・ガダマー（Hans-Georg Gadamer, 1900-2002）とジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）の関係は 1977 年の前者から後者への手紙に始まり、2003 年のデリダによるガダマー追悼講演まで、約四半世紀にもわたる。両者は 1981 年にパリでいわゆる一連の「論争」を展開したとされており、それは一般に以下のやりとりを指して言われる¹。

1. 「テキストと解釈」1981 年にガダマーがパリで行った講演をもとにした、ガダマーの解釈学およびテキスト論であり、「論争」の出発点。もともとの講演原稿を大幅に加筆・修正した内容。フランス語では「解釈学的挑戦」というタイトルになっている。

2. 「権力への善意志 (I)」上記講演に対するデリダからの短いコメント²。3 つの質問から成る。

3. 「それにもかかわらず、善意志の力」ガダマーからデリダへの応答。

1988 年にはフィリップ・ラクー＝ラバルトを加えた三人でハイデガー問題を取り上げたコロキウムをハイデルベルク大学において開催しており³、また、数は少ないものの、ガダマーとデリダ

¹ ガダマーの講演、デリダの質問、デリダに対するガダマーの応答はまずフランス語で刊行された。Hans-Georg Gadamer, «Le défi herméneutique», «Et pourtant, puissance de la bonne volonté (Une réplique à Jacques Derrida)»; Jacques Derrida, «Bonnes volontés de puissance (Une réponse à Hans-Georg Gadamer)», *Revue Internationale de Philosophie*, n° 151, Bruxelles, 1984. (いずれも加藤恵介訳、ガダマー「解釈学的挑戦」、「それにもかかわらず——善意志の力」、デリダ「力への善意志——ハンス＝ゲオルク・ガダマーへの返答」『理想』638 号、理想社、1988 年、40-52 頁。) 本発表ではドイツ語版及びその日本語訳を参照する。Philippe Forget (Hrsg.), *Text und Interpretation*, Wilhelm Fink Verlag, München 1984. フィリップ・フォルジェ (編)、轡田収、三島憲一他 (訳)『テキストと解釈』産業図書、1990 年。以下、本書からの引用は *TuI* と略記し、ドイツ語版のページ数の後「;」で区切って日本語版のページ数を記入する。なお、引用の訳出にあたっては日本語版の『テキストと解釈』を参考にしたが、発表者の判断で訳語等を断りなく変更している場合がある。

² これは 1981 年 4 月 25 日に行われたガダマーの実際の講演に関するデリダからのコメントを、録音をもとに文字に起こしたものである旨、編者フィリップ・フォルジェからの注釈がある。 *TuI*, 56; 98.

³ 本コロキウムのドイツ語版は 2016 年になって初めて書籍として刊行された。Mirelle Calle-Gruber (Hrsg.), Jacques Derrida, Hans-Georg Gadamer, Philippe Lacoue-Labarthe, *Heidegger: Philosophische und politische Tragweite seines Denkens. Das Kolloquium von Heidelberg*, Passagen, Wien 2016. (以下、本書からの引用は Heidelberg Kolloquium と略記し、ページ数を記入する。)

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

の文通も残されている⁴。さらにまた、デリダとのパリでの出会いの後、ガダマーは「解体と脱構築」(1985)、「初期ロマン派、解釈学、脱構築主義」(1987)、「脱構築と解釈学」(1988)という、いわば脱構築三部作と言えるようなテキストを発表している⁵。

本発表では、一般に「ガダマー＝デリダ論争」と呼ばれる1981年のパリでの出会いの後の両者のやり取り、具体的には、1988年のハイデルベルクにおけるコロキウム、ガダマーがデリダとの出会いの後に発表したテキストの読解を通して、「ガダマー＝デリダ論争」のいわば「続き」を考察したい。その際、ハイデガーのニーチェ解釈、形而上学の言語、ロゴス中心主義／音声中心主義といったキーワードに着目する。

2. ハイデルベルク・コロキウム

1988年2月5日にハイデルベルク大学で開催されたコロキウム「ハイデガー その思考の哲学的及び政治的射程」では、1981年のパリで「失敗」に終わったとされたガダマーとデリダによる「論争」の続きが期待されていたと考えられる。

ガダマー自身、パリでのデリダの発言を踏まえてか以下のように述べている。

彼(引用者注：デリダを指す)とは違い、今日人々の間にはコミュニケーションの完全な断絶(Bruch)があるという確信が私にはありません。ひょっとしたら私は表面的過ぎるかもしくは楽観的過ぎるのですが、私は他者—まずもって自分より若い人たちと、しかし自分と同年代の人々ともコミュニケーションすることにひどく心を砕いているの

⁴ モントリオール大学教授のジャン・グロンダンが書籍としてまとめ刊行。彼の academia.edu のページでも公開されている(2024年12月13日閲覧)。このうち、1985年9月24日付のガダマーからデリダ宛の手紙は唯一フランス語で書かれている(その他のガダマーからデリダへの手紙はドイツ語で書かれている)。そもそもガダマーがパリでの出会いの後にデリダにフランス語で手紙を認めたのは、ハイデガーのニーチェ解釈について説明するためであった。

https://www.academia.edu/9014233/Correspondance_Jacques_Derrida_-_Hans-Georg_Gadamer_1977-2000

⁵ Gadamer, „Destruktion und Dekonstruktion“, *Gesammelte Werke* 2, J.C.B. Mohr, Tübingen 1986/1999. 以下、ガダマーの全集からの引用は *GW* の後に巻号とページ数を表示する。Gadamer, „Frühromantik, Hermeneutik, Dekonstruktivismus“, „Dekonstruktion und Hermeneutik“ *GW* 10. しかしこのうち、「脱構築と解釈学」はアメリカの哲学者、フレッド・ダルマイヤーからの要請「ガダマーへの手紙」によって書かれたものであり、初出は英語である。ドイツ語版は全集に収録されている。 *Dialogue and Deconstruction*, 4ff.

です。断絶というあの機能は、哲学的思考への私自身の入口とは実際異なる概念の一つのように思えます⁶。

ガダマーはまた、「ジャック・デリダはハイデガーのニーチェ解釈の中に、形而上学の伝統、それどころかロゴス中心主義の望ましくない前進を見て取ります。ジャック・デリダのこの考えは私にとって真の挑発だったことを認めます。なぜならば、私から見ればまさにそこにこそハイデガーの偉大な功績があるからです。それは私に、ロゴス中心主義はいわば西洋の運命であることを教えてくれました。形而上学、とりわけアリストテレス哲学の根底にはロゴス中心主義があることや、このロゴス中心主義というものがハイデガー自身にとって真に哲学へ招き入れるものだったということです」⁷と述べたうえで、自身はデリダとハイデガーの間に近さを見ていること、そして自身とデリダの共通の出発点であると同時に、両者の違いでもある点がニーチェだと述べる。しかしながらその上でガダマーは、今日のテーマはナチス政権期におけるハイデガーのアンゲージュマンだと述べ、パリでの「論争」でいわば取り残されたテーマについてこの場で深く立ち入ることはない。

ではハイデルベルクでのコロキウムにおいて、ガダマーがナチス政権期のハイデガーの姿勢や「責任 (Verantwortung)」について詳細に論じたかという点については、一読の限りでは物足りなさを禁じ得ない。デリダやラクー＝ラバルトがハイデガーの戦後の沈黙、およびそれに伴う「責任」について哲学的な議論を展開したのに対して、ガダマーはハイデガーのナチス政権初期のアンゲージュマンについて、「それは大きな驚きだった」、「ハイデガーは自らの誤り (Irrtum) について決して語らなかった」等、いくつかのエピソードを披露はするのだが、最終的には「ハイデガーは自身の責任を認めてはいなかった。なぜなら、これはもはや彼の革命ではなく、退廃した革命であり、それに対して彼は責任を感じていなかった」と結論づけている。このような見方は、ガダマーが、ある一時期ナチスに傾倒したハイデガーをシラクサから帰ったプラトンに例えたことにも繋がる。しかしながら、ハイデガーのナチスへの傾倒もしくは接近をいわば一時的の気の迷いのように扱い、ハイデガーが興味を引かれていたのはあくまでのナチ政権初期であり、ナチスの革命思想とハイデガー自身の思想がかみ合わないことが自覚されて以降はハイデガーの「責任」はない（と少なくともハイデガー本人は考えていたのでは）というように、ナチス期のハイデガーの「責任」を非常に限定的に扱うことは、問題をあまりに矮小化していないだろうか。コロキウムの使用言語がフランス語だったことも背景にあるのか、コロキウムおよびその翌日のジャーナリストたちとの会合の記録の読解を通して、第二次世界大戦中および戦後のハイデガーの姿勢について、ガダマーの口から当時のエピソード以外の独自の分析が語られたという印象を得ることは残念ながらできない。このことは、コロキウム当日の聴衆からの質疑、および翌日

⁶ Heidelberger Kolloquium, 38.

⁷ Heidelberger Kolloquium, 38.

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

のジャーナリストたちとの会合において、議論のために重要と思われる内容が、デリダもしくはラクー＝ラバルトを指名して質問されていることにも表れているように思われる。

ハイデルベルクでのコロキウムについては更なる読解、分析が必要だが、ガダマーの発言に限って言えば差し当たり新しい主張は見られず、デリダとの「対話」が発展したとも言えない⁸。ハイデルベルクにおいて、ガダマーとデリダはガダマーが対話に不可欠とみなす「共通言語」（ここではフランス語）で語り、ハイデガーの沈黙や「責任」という「共通の事柄」に参加するという、一見してガダマー的な意味での「対話」が成立してもよいような条件にあったと考えられるが、個人的には、2回目の対面はある意味パリでの出会い以上に「成功」しなかったのではないかと思われる。ハイデルベルクでのコロキウムはその発言ややりとりが用意された原稿に基づいてではなく「即興で (improvisieren)」行われたこともあり、解釈学と脱構築についての議論が展開されるのは、やはり書かれたテキストにおいてではないだろうか。

3. ガダマーからデリダへの「応答責任」

以上のことから、以下ではガダマーがデリダとの出会い以降に発表した脱構築に関するテキストから、いくつかのポイントに絞ってガダマーの主張を紹介したい。ガダマーとデリダがいわば共に相続した思想家としてはもちろんハイデガーが挙げられる。デリダは『テキストと解釈』に所収されている「権力への善意志 (II) 署名を解釈する (ニーチェ/ハイデガー)」において、ガダマーの名前は一切出さず、ハイデガーのニーチェ解釈の分析を行っている。

前述のように、ガダマーの「解体と脱構築」(1985)、「初期ロマン派、解釈学、脱構築主義」(1987)、「脱構築と解釈学」(1988)はデリダの「権力への善意志 (II)」への応答として読むことができ、事実「解体と脱構築」において、ガダマーは自身とデリダの立ち位置を、ハイデガーの受け止め方の違いと捉えている。また、デリダが「権力への善意志 (II)」ではもはやガダマーに言及すらしていないにもかかわらず、ガダマーの方は律義にデリダが提唱した問い、すなわちニーチェとハイデガーに関して「脱構築と解釈学」において応答を試みている。

「権力への善意志 (II)」で提示されているデリダの見方を(かなり乱暴に)要約するならば、ニーチェを最後の形而上学者としたハイデガーこそが形而上学の伝統を引き摺ったままではないかということである。ハイデガーはニーチェを最後の形而上学者と呼び、ハイデガー自身が西欧の形而上学の終焉を指摘し、自分がそれを乗り越えたとしているが、デリダにしてみれば、そう指摘しているハイデガー自身が「形而上学の言語 (die Sprache der Metaphysik)」に捕らわれており、この言葉で語り、形而上学を乗り越えていない。その際デリダがニーチェを引き合いに出して取り組もうとしているのは、ひとつの物事、ひとつの係争事項を考え、語るという、西洋形

⁸ やっとガダマーとデリダの対話が始まろうかというところで、司会者の Reiner Wiehl によって聴衆へ質問が開かれている。Heidelberger Kolloquium, 76.

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

而上学が前提としている統一性、唯一性であり、ハイデガーも気づかずともその前提に立っているということである。この点を踏まえると、デリダがバリでガダマーに寄せた批判の意義や背景がよりわかりやすくなるのではないか。つまり、デリダにとってガダマーの解釈学は、デリダがそもそも形而上学の域を出ていないと見なしているハイデガーの思想を超え出るものではなく、ハイデガーの哲学との連続性をもつものだったのである。

ところで、デリダがハイデガーのニーチェ解釈を読解・分析する際にもう一つ注目する点が、「全体 (Ganzheit)」の思想である。デリダはハイデガーが「全体」の思想と永劫回帰の思想と一緒にして考えていると指摘したうえで、ハイデガーの言うように、全体としての存在についての思惟に深く捉えられている者を形而上学者だとするならば、ニーチェを形而上学者というのは(最後の、という形容詞をつけたとしても)いかなるものだろうかと苦言を呈し、この点ではハイデガーに賛同を示さない。デリダはニーチェの永劫回帰の思想に着目し、「生けるものは全体と較べたならばまったくとるにたらないものであるにはちがいないが、すべてはかつていちどは生へと変換されたことがあるのであり、また今後もそのようなことが続くことになるのだ」というニーチェの言明が永劫回帰に関わるものである以上、全体性に関する思惟、あるいは全体と部分の対立などという考え方にはめこみえないものであると見なしている⁹。

このようにデリダにとってはハイデガーのニーチェ解釈の統一性 (Einheit) と西洋の形而上学の統一性は切っても切れない関係にある¹⁰。この点について、ガダマーは「言語とは対話である (Sprache ist das Gespräch)」という自身の立場を崩さず、ではそもそも「西洋の形而上学」、「形而上学の言葉」とは何なのかと疑問を呈する¹¹。「形而上学の言語」についてのガダマーの言及は彼の複数のテキストに見られるが、興味深いのは、ガダマーが 1929 年にハイデガーが行ったフライブルク大学教授就任講義に関しては、以下のように述べていることである。

実際、この講義において初めて、後期ハイデガーの思考の試みにおいて重要な、形而上学の克服、形而上学的思考の克服という大きなテーマがはっきりとする。しかしながらその講義自体もまだ形而上学の言語で語られている。¹²

引用にあるように、ガダマー自身ハイデガーによる「形而上学の言語」の使用を認めてはいるのだが、「脱構築三部作」において、ガダマーは絶えず自身の師であるハイデガーを擁護しているという印象は否めない。ガダマーに言わせると、ハイデガーによるニーチェ解釈のモットーは

⁹ TuI, 76; 136.

¹⁰ TuI, 64.

¹¹ *Dekonstruktion und Hermeneutik*, GW 10, 141, 144.

¹² Gadamer, *Was ist Metaphysik?* in: *Gesammelte Werke* 3, 210.

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

「何世紀も経った—そして新たな神はいない」¹³だというのが、この点についてガダマーは以下のよう問う。

しかしながら一人の新たな神についてハイデガーが何を知っているというのか？彼は新たな神を予感しているのか、それとも彼にはただ新たな神に呼びかけるための言語がないだけなのか？形而上学の言語があまりにも彼（ハイデガー：引用者）を魅了したのだろうか？言語とは、その背後に回ることができないということがあらかじめわかっているにもかかわらず、精神の単なるバビロン捕囚などではない。同様に言語の混乱は、聖書による伝承にあるように、語族の多さや、人間の不遜が導き出した言語の多さだけというわけではない。言語の混乱が含むのはむしろ、人と人との間に口を空けている、常に新たな混乱を創り出す異質性の全体（das Ganze der Fremdheit）なのである。しかしながらそこには言語の混乱を克服する可能性もまた含まれている。なぜならば言語とは対話だからである。ことば（Wort）を探さなくてはならないし、他者に届くことばを見つけることはできる（Man muß das Wort suchen und kann das Wort finden, das den anderen erreicht）、それどころか、外国語、母語、他者の言語を学ぶことさえできるのだ。他者のところにたどり着くために、他者の言語に移動することができるのだ。これらすべてのことを言語は言語として行うことができる。¹⁴

上の引用において、ガダマーは形而上学の言語についての問いから出発し、言語および自身がつ言語のイメージの分析に入っていく。さらにガダマーはここで「言語とは対話である」という自信の立場を再び強調する。引用はしなかったものの、同じ箇所ではガダマーはジャック・ラカンを引き合いに出しつつ、「ある他者に向けられていないことば（das Wort）は、空虚なことば（ein leeres Wort）」であり、この点が「対話の優位性」を成していると主張する¹⁵。

「解体と脱構築」には他にも、デリダのハイデガー解釈とは異なる、ガダマー独自の視点と断っていいであろう興味深い点が見られる。

（…）同じ意味で、私が試みたような、解釈学を対話に向けることも、ドイツ観念論の弁論術よりも後、つまりプラトンの弁論術にまで遡るだけでなく、このソクラテス的弁論術の転回の背後にある前提を目標としている。そしてそれは複数のロゴスにおいて（in den Logoi）求められ、呼び起こされる想起（*Anamnēsis*）なのである。神話から創られ、しかしながら極めて理性的に意図されたこの再び想起すること

¹³ Destruktion und Dekonstruktion, GW 2, 364.

¹⁴ Destruktion und Dekonstruktion, GW 2, 364.

¹⁵ Destruktion und Dekonstruktion, GW 2, 364.

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

(Wiedererinnerung) はそれぞれの魂 (Seele) が再び思い出すというだけでなく、常に、一つの対話である「我々を結びつけるかもしれない精神」の再想起なのである。対話の中にいるということは、自身を越え出て存在すること、他者と共に考えることそして一人の他者として自身に還ってくることなのである。ハイデガーが本質 (Wesen) という形而上学的概念をもはやそこに居合わせる者の存在として (als die Anwesenheit des Anwesenden) 考えず、「本質」という表現を一つの動詞 (Verbum)、つまり時間語 (Zeitwort¹⁶) として、つまりは「時に関して (temporal)」理解するならば、それはすなわち本質が、本質に即して居-合わせるもの (An-Wesen) として理解されており、ある意味で、本質という概念が「代理として司る (Verwesen¹⁷)」というよく使われる表現の答えとなるべきなのである。(中略) さて、ハイデガーが存在の意味 (Sinn von Sein) について問うとき、「意味」のことも形而上学やその本質概念という意味で考えているのではなく、ある決まった答えが予期されているのではなく、ある問いの道筋を示すという問いの意味/方向性 (Frag Sinn) として考えていると私は思う。¹⁸

『真理と方法』においてと同様、ここでもガダマーは「意味とは方向性という意味である」テーゼを繰り返し、意味もしくは意味内容というものは固定できる何かではなく、変化するものであるという見方を提示する。本テキストが発表されたのはドイツ語版『テキストと解釈』出版の翌年であり、「解体と脱構築」においてドイツ語版『テキストと解釈』の執筆者でもあるマンフレート・フランクとフィリップ・フォルジェの名前が挙げられていることから、ガダマーがこのテキストを『テキストと解釈』における議論をもとにして執筆したであろうことは想像に難くない。

最後に、ガダマーがデリダとの関連においてロゴス中心主義/音声中心主義に言及している箇所を紹介しておきたい。

(...) それゆえハイデガー自身と似たように、デリダは語の中、そして語の意味における多様性の中、語の意味の違いという不確かな潜在性の中にある秘密に満ちた多様性に没頭する。ハイデガーが文と発話について、そもそも語と文を可能にする、存在の開放性/未決性 (Offenheit) を問い返したことにより、ハイデガーは語から形成される文、対象、そして矛盾のすべての側面にいわば先手を打つことができたのである。それと同様にデリダは、時間の中で「差延 (différance)」として存在にとって目に見えるようになる痕跡というものを追及しているように思われる。彼はしかしフッサールから出発してハイデガーを読んでいるので、フッサール的な概念に依拠しており、そのことは『存在と時間』およびデリダの超越論的自己描写に感じとることができる。それはハイデガ

¹⁶ „Verbum“と同様、この単語も「動詞」を意味する。

¹⁷ „verwesen“には「腐敗する」、「朽ちる」、「死ぬ」という意味があることにも注意。

¹⁸ Destruktion und Dekonstruktion, GW 2, 369.

2024年12月14日(土)

2024年度ガダマー協会第2回大会「テキスト」の可能性——脱構築と解釈学

「応答責任としての対話——ガダマーとデリダ」白鳥まや

一のロゴス中心主義の証明となるものであり、私が、対話のみならず、詩と、内なる耳に詩が現れることが、言語の真の現実性に寄与することを説明すると、デリダはそれをそれどころか「音声中心主義」と名付けるのである。まるで発話もしくは声が、非常に集中した再帰的な意識 (das angestrengteste reflexive Bewusstsein) のためだけにその遂行において現前し、もはや消失しないかのように。それは再帰についての安っぽい議論ではなく、話す者や思考する者になら誰にでも起こること、まさに「考えている」からこそ自分では気づかないことを思い起こすことなのである。¹⁹

4. まとめ

本発表では、これまでガダマー研究においてそれほど注目されてこなかった、1988年のハイデルベルクでのコロキウム、およびデリダとのパリでのやりとりの後にガダマーが発表した脱構築をテーマにしたテキストを取り上げ、ガダマーなりのデリダへの応答の一部を紹介した。今回取り上げたテキストがこれまであまり注目されてこなかったのは、ガダマーとデリダがハイデガーのニーチェ解釈に取り組むという問題の複雑さに加え、その分析の煩雑さに反して、ガダマーの主張がハイデガー擁護の域を出ないという点にもあると考えられる。しかしながら本発表でガダマーの「脱構築三部作」と名付けたテキストには、デリダが「権力への善意志(Ⅱ)署名を解釈する」で展開している議論と重なるテーマが他にもあり、更なる読解と分析を進めていくことが今後の課題の一つである。

¹⁹ Destruktion und Dekonstruktion, GW 2, 371-372.